

CirculationからFulfillmentへ

- 早慶図書館システム共同運用の先に見えるもの -

おかの じゅんこ
岡野 純子

(三田メディアセンター課長)

1 はじめに

慶應義塾大学メディアセンターは、2019年9月、早稲田大学との共同運用による新図書館システム(Alma/PrimoVE)を導入した。本稿では新システムへの移行作業における閲覧業務の課題や成果、早慶共同運用を踏まえた今後の展開について報告する。

(1) 目標の設定

2017年7月のRFP(提案依頼書)策定時に、新図書館システムに求める重要な機能として、「早稲田と慶應の図書館がまるで一つであるかのように、CirculationやResource Sharingができること」を掲げていた。Almaはこの理想とする閲覧サービスを実現できるシステムであったが、移行や運用のためには、規則や業務フローをAlmaの仕様に合わせて簡素化・再構築し、慶應独自の運用を廃止する必要があった。また、早慶双方の規則の違いも大きく、まずは学内の調整を優先することとして、Alma(PrimoVE)を使った早慶間の資料取寄せ等はひとまず見送り、将来の早慶連携サービスのための基盤固め=各々の閲覧業務の安定的運用を目標として設定した。

移行のための検討体制は、各キャンパスの閲覧担当者から構成される「全塾閲覧担当者会議(月1回)」と、その会議体のもとに立ち上げた、閲覧業務で想定されるフローすべてをAlmaで検証する「検証チーム(週1回会議)」, Almaでうまく動かないフローを再構築する「設計チーム(月2回会議)」が中心的役割を果たした。また、システムへの利用者データ登録方法を検討するため、メディアセンター本部システム担当と利用者登録担当間のミーティングも定期的に行った。このように、多くの閲覧担当スタッフが協力してこの一大プロジェクトに当たった。

(2) Almaの特徴

閲覧業務を表現する言葉「Circulation(循環)」は、Almaでは「Fulfillment(充足)」に変わった。ここ

には紙の資料を循環させるだけでなく、紙も電子も学内外の利用可能な資料も含めて一元管理し、利用者に提供して充足・満足させるという意味が込められている。Almaは2010年から使用してきたAlephの後継システムであるが、根本から見直して開発されているため、全く異なるシステムになっている。Almaの主な特徴は以下のとおりである。

- ・貸出や予約・取寄せ規則が「資料」ではなく「配置場所」に紐づく。
- ・貸出期限の延長・更新限度は、「回数」ではなく、「期間」で設定する。
- ・利用者の「所属キャンパス」による規則設定ができず、「所蔵資料」に対して設定を行う。
- ・貸出や予約・取寄せ規則(Fulfillment Unit)、利用者身分(User Group)は原則各5つまでに簡素化する。
- ・資料の状態(「新着展示中」「修理中」「除籍」等を含む)を自由に作成・設定できない。
- ・貸出規則の切替(例えば「通常貸出」から「長期貸出」へ)は、手作業で行う。
- ・PrimoVE(利用者が使う蔵書検索システム)からは、特定の一冊の「アイテム(資料)」ではなく「タイトル」に予約がかかる。(巻号付の資料を除く)
- ・帳票は紙で印刷するのではなく、メールやタブレット端末等の画面上で確認する仕様で、ペーパーレス化が図られている。
- ・利用者データの種類が、学生部等他部署が管理する「External」と、図書館がローカルに管理する「Internal」の2種類に分かれており、Externalデータは手動で修正しない前提である。
- ・月1回、機能がアップデートされるため、ローカル運用や外付けシステム連携の維持が難しい。

2 課題と成果

Alma導入時の数ある課題の中で、特に重要で調

整に時間を要したのは、「貸出・予約取寄せ規則の簡素化」、「アイテム予約からタイトル予約への変更」であった。

(1) 貸出・予約取寄せ規則の簡素化

貸出・予約取寄せ規則は、Almaでは、「Fulfillment Unit」というこれまでと全く異なる設定方法(図1)になり、「配置場所」に紐づく仕様が変わった。

図1 Alma Fulfillment Unit Rules設定画面
(例: 協生館図書室/院生・教職員/30日貸出)

Alephでは、配置場所は資料が置いてある場所を示すだけのコードで、貸出・予約取寄せ規則は資料に紐づき、さらに利用者の所属や身分によりコントロールされていた。6キャンパスにある8つの図書館の規則は、キャンパスの特性に合わせて多種多様で、一つの配置場所に複数の規則を持つ資料も多数混在していた。しかし、Almaでは規則の数だけ配置場所を増やしてしまうと100個の新規コード作成が必要で、身分と貸出期間のバリエーションも多く、設定が複雑になる恐れがあった。そこで、以下の簡素化を行い、利用者やスタッフにも分かりやすく、継続的に維持・管理できるような改善を目指した。

- ・ 利用者の所属キャンパスによる規則の撤廃
利用者身分を26種類→14種類に縮小
- ・ 和書と洋書の貸出期間(学部生)の統一
和14日・洋30日→和洋14日に統一
- ・ 身分×貸出期間パターンの削減
- ・ 同一資料タイプの貸出規則の全キャンパス統一
図書14日・雑誌7日・学位論文7日等
- ・ Item Policy = 貸出不可の使用
配置場所の一部に貸出不可資料が存在している場合、資料に規則設定を行うItem Policyを貸出不可資料のみに例外的に使用し、配置場所の

増加を抑制

- ・ 休校に伴う長期貸出設定の全キャンパス統一
対象身分や対象資料、開始日・終了日・一斉返却日を統一し、手作業の負荷を軽減
- ・ 山中資料センター(外部書庫)資料の規則簡素化
今後の資料再配置や将来的なShared Printを見据えて、元の所蔵キャンパスの規則を引き継がず、3種類の配置場所=貸出パターン(「図書」「雑誌」「貸出不可」)に集約し、どの身分でも取寄せ可に変更

(2) アイテム予約からタイトル予約への変更

PrimoVE(利用者)からの予約・取寄せの方法が個々の資料に予約をかけるアイテム予約から、利用を希望するタイトルに予約をかけるタイトル予約に変更されたことへの対応は、今回のシステム移行で最も苦労した点であり、新たな道筋が見えた点でもある。

タイトル予約では、どのアイテム(資料)が選ばれるかシステムが自動判定(在架や返却期限日が近い資料が優先)するため、「提供に時間や費用がかかる外部書庫資料も一般の配置場所と同等に選ばれてしまう」、「購入希望者であっても既にそのタイトルに予約者がいれば一番先に資料を受け取ることができない」という状況も発生し得る。「資料が書架にあるキャンパスは受取館に選べない」、「一人の利用者が同一資料を複数取寄せすることができない」仕様は、予約の公平性の点からは利用者にとってメリットがあるが、移行直後、一部の利用者から「以前に使っていた機能がなくなった」とクレームが寄せられ、その説明に苦慮した。また、複数冊所蔵しているタイトルは1つのアイテムから予約の有無を一目で判別するのは難しい。返却と同時にその資料が予約確保となったり、予約者は1名であるのに、同じタイトルのすべての貸出中資料が更新不可になる等、スタッフがシステムの次なる動きをコントロールできず、利用者に従来と同様の案内ができないことに当初は戸惑いを感じた。これはのちに、予約が多い資料を多くの利用者に早く提供できるよう回転率を上げるといったシステムの設計思想であると理解できたときには目から鱗が落ちる思いだった。問題解決と同時に、私たちスタッフの頭の切り替えが必要であったタイトル予約への移行は、以下の効果を生み出した。

◆従来の運用の合理化

- ・利用者への迅速な資料提供
予約順に従って一人一冊ずつ提供する。
最も早く提供できる資料を自動判定し、人気タイトルの回転率を上げる。
- ・スタッフの業務負荷軽減
予約資料を書架から取り出す際に資料が所在不明な場合でも、先に別の利用者に借り出された場合でも、他キャンパスの同一資料へのスキップ機能により、予約のかけ直しや利用者への連絡が不要になった。すべての資料が提供不可の場合は自動的に利用者にキャンセルメールが送信される。
- ・無駄な物流の削減
在架資料があるとそのキャンパスに取寄せ不可、同一資料を複数予約不可という仕様によりキャンパス間の物流が減り、予約棚のスリム化に繋がった。

◆新たな気づき

- ・慶應全体で必要冊数を購入する可能性の検討
利用者もスタッフも各キャンパスの受入状況や所蔵状況をより意識・把握できるようになった。各キャンパス固有の予算でそれぞれのタイミングで購入する方法から、慶應全体として必要冊数を購入・維持する方法も検討できるか？(AlmaのDARA(データ分析レコメンデーション機能(利用実態にあわせた複本購入提案等))の活用等)
- ・さらなる貸出規則統一の必要性
システムがアイテムを自動選択するタイトル予約では、同じタイトルであってもキャンパスによって貸出期間が異なると利用者の不利益につながる事が分かり、その視点からの規則統一がもう一段必要であると実感した。

◆新機能の追加

- ・Locations (Remote Storage) 機能
開発元であるEx Libris社に要望し、外部書庫・閉架書庫に対して提供順位を下げる設定が追加された。

(3) Alma設計思想の理解

Almaはコンソーシアム利用を考慮したシステムで、先に説明した標準仕様のタイトル予約は、「資料の所蔵館」や「利用者の所属キャンパス」という

垣根を越えて、「サービス対象の利用者全員」に、「サービス対象の資料全体」の中から、希望する資料をいち早く届けることに主眼が置かれている。これまで染みついていた「自分のキャンパスの所蔵資料」を「自分のキャンパスに所属する利用者」に提供するという意識のままだと、「これもできない」、「あれもできない」とAlmaの特徴を不具合のように捉えてしまうことが多々あり、意識を変えて、Almaの設計思想を理解することが一番の課題であったように思う。システムを思想を理解し、サービスや運用をシステムに合わせて効率化していくことで新たな方向性も見えてくる。慶應の全所蔵資料をサービス対象として考えるResource Sharingへの意識の変化は、私たちがさらに先に進む原動力になるのではないかと感じている。

3 今後の展開

Alma導入にあたっては、さまざまな問題に直面したが、現在、大きな混乱なく閲覧業務を行うことができています。最後に、今後残されている課題や早慶間のサービス展開について考えてみたい。

(1) Alma Releaseへの対応

AlmaやPrimoVEには、月に一度、システムのアップデートがある。予約や利用者登録に関する不具合は未解決のまま残されており、引き続きEx Libris社との交渉が必要だが、移行時には搭載されていなかった機能の追加や修正も行われている。これらの新機能や修正機能を検証し、使用するかどうか取捨選択して、システムを動かしながら必要な機能を拡張していくことも今後必要な作業である。また、世界各国のユーザーから多く寄せられた要望を反映した更新により、想定していない変更が生じることも多く、毎月のシステム更新後に、基本フローのチェックや、一部使用している外付けシステムとの連携チェックを行い、マニュアル修正を行っていくことも旧システム時代にはなかったことである。これが「パッケージで動く」ということであり、世界の情勢(欧米では紙媒体の利用率が低く電子化が進み、分け隔てなく提供している等)を実感しつつ、ローカル運用や外付けシステムは極力そぎ落とし、Almaをあるがままに使用する=世界標準の方向性や流れに乗ることの重要性も痛感している。

(2) 早慶連携の強化

これまで、1986年4月1日制定の「早稲田大学および慶應義塾の図書館相互利用に関する協定書」(以下「協定書」とする)および1985年10月1日制定の「早慶図書館相互利用実施要綱」(以下「実施要綱」とする)に沿って、早慶間の相互利用(入館や貸出、相互貸借(以下「ILL」とする)サービスを進めてきたが、早慶間のシステム基盤が整い、スタッフ間の情報共有や連携も強化した今、さらなる展開を考える時が来ている。

システム移行後、週2回だった早慶間の定期配送便は、平日毎日運行されるようになり、資料取寄せ時間も大幅に短縮された。PrimoVEで早慶互いの所蔵状況が利用者から見えるようになったことで、慶應の所蔵資料が貸出中の場合、以前は予約をかけて待っていた利用者が、早稲田の所蔵資料は在架だと知るとILLサービスを利用するような変化も見られる。2019年9月のシステム移行後の慶應(三田)から早稲田への現物貸借依頼数(図2)は実数のためそこまで顕著な変化ではないが、依頼延数は確実に増加しており、早慶間ILLの活性化を体感している。(残念ながら新型コロナウイルス感染拡大に伴い、早慶間の入館や貸出サービス、ILLは4月7日から一時停止し、7月1日より複写ILL、9月8日より現物ILLが再開したところである。)



図2 慶應(三田)から早稲田への現物貸借依頼数

今後のさらなる展開は、第一段階として、「協定書・実施要綱内でのサービス拡大」が考えられる。

- ・身分証による入館および閲覧可能な対象身分・対象館を広げる。
- ・利用券発行により貸出可能な対象身分・対象館を広げる。
- ・利用券を持つ利用者が、所蔵機関に来館せずとも、所属機関で目的の資料を受け取ったり、返

却できるようにする。(現状と同様、貸出や返却に係る事務処理を行うのは所蔵機関)

上記に関しては、2020年4月1日付で協定書と実施要綱の改正を行い、入館や貸出の対象身分を「専任教職員」から「常勤教職員」へ一部拡大している。

第二段階として、「新たなAlmaの機能(Resource Sharing)を用いたサービス拡大」が考えられる。

- ・スタッフによる早慶間の資料取寄せをAlmaで実現する。
- ・利用者による早慶間の資料取寄せをPrimoVEで実現する。

KOSMOSの検索結果から早慶双方の所蔵状況を確認できるだけでなく、そこから直接、予約・取寄せできることを利用者は今後より一層期待するだろう。早慶図書館システムプロジェクトのスタートに合わせて、2017年5月12日に「早稲田大学図書館と慶應義塾大学メディアセンターのシステム共同利用による連携強化に関する覚書」が締結された際、その目的は、「システム運用の安定化やコストの削減」、「早慶間での人的交流の促進」とともに、「利用者サービスおよび資料のさらなる充実」があった。“早稲田がもつ580万冊、慶應がもつ490万冊を合わせて、約1,000万冊以上の所蔵冊数をもつ図書館が仮想的に実現される”¹⁾という構想もあった。人的交流の促進という側面では、確かに、新型コロナウイルス感染症対策のための情報交換や、授業で指定された資料の管理方法として、Alma Course Reserve機能を使用している早稲田にヒアリングをする等、気軽に質問しあえる関係性が構築できたことはこのプロジェクトの賜物である。一方で、利用者サービスの立場から見ると、本稿を執筆した2020年8月時点は、やっと第二のスタート地点に立ったところであり、理想のサービスに向けては道半ばである。これらの実現のためには、「罰則ルールの違い」、「利用者データの共有」、「早慶共通の予約・取寄せ規則の構築」等、さらに双方で乗り越えなければならない大きな課題がある。しかし、これまで築いてきた関係性を生かし、歩みを止めることなく、早慶間のResource Sharingを一歩ずつ進めていきたいと考えている。

参考文献

- 1) 深澤良彰. 館長からのメッセージ「大きな」図書館の実現～早慶図書館システム共同運用実現の真の意味～. 早稲田大学図書館年報. 2018, 2017年度, p.2.